

# 〇ととき名義考

『民族』昭和三年十一月號、著者轉載承認)

朝鮮、京城帝國大學法文學部教授

文學博士

小 倉 進 平

古クカラ萬病治療ノ靈草トタ、ヘラレテ居ル人參(學名 *Panax Ginseng* C. A. Mey.) ハ日本デハ古ク加乃爾介久佐・爾已太・久末乃以、近クハにんじんト唱ヘラレマタ嘗テハ漢土又ハ朝鮮カラ傳來シタ上等品ヲ判事手トモ稱シタ西洋語デハ *Eng. ginseng*, *Fr. Span.*, *Italy, ginseng*, *Pe. ginsão*, *Dan.*, *Germ. ginseng* デアル朝鮮デハ古ク之ヲシ *Sim* (「東醫寶鑑」及ビ朝鮮版「漢清文鑑」) トイヒ又合 *in-sâm* ト稱クタ *Klaproth*: “*Asia polyglotta*” (1823) ニハ *Inson*, *sip* 又同氏ノ「三國通覽圖說」(1832) ニモ *sip*, *inson* トアル、*sip* 又ハ *sip* ハ「東醫寶鑑」及ビ「漢清文鑑」ノ *sim* ニ當ルモノナルンク *inson* 又ハ *inson* ハイフマデモナク人參ノ朝鮮字音デアル然ルニ女眞語デハ人參ヲ韓兒和荅トイヒ滿洲語デハ *olhoda* トイヒ「蒙語老乞大」中ニ新羅人參ヲ *Sila-kin-ohotai* (「四體清文鑑」・「五體清文鑑」) ニ人參ノ蒙古語ヲ *humon-ên* トシテアルガコレハ人藥ノ義) トシテアルカラ滿蒙兩語ハ同一語系デアリ支那語トハ其ノ起原ヲ異ニスルモノデアル余ガ本編起草ノ目的ハ人參ノ語原、其ノ傳來ノ歴史、又ハ植物學上ノ研究ヲ試ミヨウトスルノデハナイ、其ノ形狀ニ於テ、名稱ニ於テ、人參ト著シキ類似ヲ有スル沙參ノ一類ニ與ヘラレタ和名即チととき(又とどきトモ)ナル語ノ由來ニツキ一言ヲ費サウトスルノデアル

沙參ハ學名ヲ *Adenophora verticillata* Fisch. トイヒ前記人參トハ全ク其ノ種別ヲ異ニスルモノデアル「本草綱目」ノ沙參ノ條下ニ

時珍曰、沙參處處山原有之、二月生<sub>レ</sub>苗、葉如<sub>二</sub>初生小葵葉<sub>一</sub>、而團扁不尖、八九月抽<sub>レ</sub>莖、高一二尺、莖上之葉則尖長如<sub>二</sub>枸杞葉<sub>一</sub>、而小有<sub>二</sub>細齒<sub>一</sub>、秋月葉間開<sub>二</sub>小紫花<sub>一</sub>、長二三分、狀如<sub>二</sub>鈴鐸<sub>一</sub>、五出白蕊、亦有<sub>二</sub>白花者<sub>一</sub>、並結<sub>レ</sub>實大

如冬青實中有細子霜後苗枯、其根生沙地者長尺餘、大一虎口、黃土地者則短而小、根莖皆有白汁云々。  
トアルノデ一般ガ窺ハレル、シカモ其ノ形狀ガ人參ト類似セルモノアルヲ以テ往々之ヲ以テ人參ナリト詐リ稱  
スルモノガアッタ、同書沙參ノ條前掲記事ノ直下ニ根ヲ説明シテ

八九月采者白而實、春月采者微黃而虛、小人亦往往紫蒸壓實以亂人參、但體輕鬆、味淡而短耳。

トアルガ如キハソレデアル斯ノ如ク沙參ガ人參ト混同セラレタノミナラズ種々ノ點ニ於テ比較的形體ヲ同ジウ  
スル薺危及ビ桔梗ノ如キモ人參及ビ沙參ト互ニ混同セラレ人參ノ偽物ガ盛ンニ製造セラレルヤウニナツタ、「本  
草綱目」薺危ノ條ニ

時珍曰、薺危苗似桔梗根似沙參、故姦商往往以沙參薺危通亂人參云々。

ト姦商等ガ薺危、沙參ヲ以テ人參ナリト偽稱シテ販賣シタコトヲ説キ、更ニ

葛洪肘後方云、隱忍草苗似桔梗人皆食之、搗汁飲治蠱毒、據此則隱忍非桔梗乃薺危苗也、薺危苗甘可  
食、桔梗苗苦不可食、尤爲可證、神農本草經無薺危止有桔梗一名薺危、至別錄始出薺危、蓋薺危桔梗  
乃一類有甜苦二種、則其苗亦可呼爲隱忍也。

トテ神農本草經スラモ薺危ヲ以テ桔梗ノ一名ナリトナシ其ノ間ノ區別ヲ設ケナカツタヤウナ事モアツタコトヲ述  
ベテ居ル、其他「和漢三才圖會」ノ如キモ

朝鮮人參猶來中國互市、亦可收子於十月、下種如種菜法、秋冬采者堅實、春夏采者虛軟、非地產虛實也、  
偽者皆以沙參薺危桔梗采根造作亂之、沙參體虛無心而味淡、薺危體虛無心而味甘、近有以人參先浸取汁自啜、乃  
曬乾復售、謂之湯參、不任用。

トテ世ニハ人參ノ偽物ガ甚ダ多カッタコトヲ説イテ居ル、人參・沙參・薺危・桔梗ガ互ニ其ノ形體ヲ同ジウシ  
タコトニ關シテハ以上ノ諸書ノ外、尙ホ

(前略) 春ニ至リ舊根ヨリ葉ヲ生ズ形圓カニシテ沙<sup>○</sup>參<sup>○</sup>ノ脚葉ノ如シ根ノ形ハ人<sup>○</sup>參<sup>○</sup>ニ似テ輕虛ナリ云々 (「本草綱目啓蒙」薺<sup>○</sup>萐<sup>○</sup>ノ條)

沙參ハ原野ニ多シ冬春ノ葉ハ圓ニシテ積雪草ニ似テ葉莖長厚ク深綠色也春夏莖ヲ抽高サ二三尺葉莖ニ對生ス多クハ三葉也亦四五葉相對スルモアリ形狀桔梗葉ニ似タリ秋梢ニ穗ヲナシ細枝ヲ分チ花下垂ス風鈴ノ様ヲナシ花瓣桔梗花ニ似テ五尖大サ四五分碧色也亦白花アリ種類至テ多シ (「古名錄」佐岐久佐奈ノ條)

ノ如キ記事ガ數限リナク有ル延喜式典藥寮諸國貢藥目次中ニ人參ノ名ガ見エテ居ルガ後世ノ學者ハ當時日本ニハ人參ノアルベキ理由ガナイ人參ハ渤海カラ傳ハッタノガ初デアアル延喜式ニ人參トアルノハ沙參ヲ意味スルノデアルト推論スルニ至ッタノモ其ノ論ノ是非ハ別トシテ人參ト沙參トノ形體ガ極メテ類似シテ居ルコトヲ物語ルモノデアアル

沙參ノ名ハ「本草和名」ニモ出テ居ルガ和訓ヲ施シテ居ナイ「和漢三才圖會」ニハ沙參ニ假名ヲ附シテしゃじんとシ字音ヲ以テ呼ビコレマタ和名ヲ附シテ居ラヌ要スルニ沙參ニ對スル古訓ハ詳カデナイ併シナガラ後世ニナルト色々ノ名稱ガ之ニ附セラレタ今其ノ若干ヲ左ニ掲ゲル

(1) 薺<sup>○</sup>萐<sup>○</sup>ノ形狀ガ沙參ニ似テ居ル所カラ沙參ニ對シテ薺<sup>○</sup>萐<sup>○</sup>ノ和名タル佐岐久佐奈 (「本草和名」)、美乃波 (「本草和名」) ヲ附シタコトガアッタガ其ノ誤リタル餘リニ明白ナ事デアアルカラ今特ニ茲ニ説明セヌ

(2) つりがね人參、又つりがね草、花形ノ釣鐘ニ似タルヨリイフ茲ニ人參ナル名稱ヲ適用シタノハ沙參ト人參トノ形體ガ類似シテ居ル結果デアッテ形體上ノ混同ガ名稱ノ上ノ混用ヲモ誘起スルニ至ッタ

(3) ととき、「人參和名考」ニ沙參ハ古ク本草和名ニモ出テ居ル程デアアルカラ日本ニモ存シタラウガ其ノ和名ガ傳ハラヌ但シ今日俗ニとときトイフ又つりがね草トイフモノコレデアルト述ベテ居ル當時沙參ヲとときト稱シタコトガ知ラレル

(4)ととき人參、つりがね人參同様コ、ニモ人參ノ名稱ガ侵入シテ居ル元來沙參ニ類シタモノニ羊乳トイフノ  
ガアル、羊乳ハ「本草綱目」デハ沙參ノ條下ニ之ヲ出シ

陳藏器曰、羊乳根如<sup>ニ</sup>薺<sup>〇</sup>而圓、大小如拳、上有<sup>ニ</sup>角節<sup>〇</sup>折<sup>レ</sup>之有<sup>ニ</sup>白汁<sup>〇</sup>、人取當<sup>ニ</sup>薺<sup>〇</sup>苗<sup>〇</sup>作<sup>レ</sup>蔓<sup>〇</sup>折<sup>レ</sup>之有<sup>ニ</sup>白汁<sup>〇</sup>、  
ト説明シテアル通り蔓草デアアル羊乳ガ沙參ノ條ニ竄入シタコトニ就イテハ「本草綱目啓蒙」沙參ノ條ニ

羊乳原別錄ニハ別條ナリシヲ時珍沙參ノ條ニ併テ一トスルハ非ナリ

トイヒ「和漢三才圖會」羊角菜ノ條ニハ

按羊乳即沙參之別名也、然陳氏所<sup>〇</sup>謂<sup>〇</sup>羊乳乃羊角菜而倭沙參也<sup>〇</sup>以有<sup>レ</sup>蔓爲<sup>レ</sup>人參<sup>〇</sup>和州河州信州處々山中有<sup>レ</sup>之、蔓  
生、其蔓葉共似<sup>ニ</sup>初生蘿<sup>〇</sup>摩<sup>〇</sup>及<sup>〇</sup>草薺<sup>〇</sup>葉<sup>〇</sup>、八九月葉間開<sup>ニ</sup>小白花<sup>〇</sup>、云々

トテ羊乳ハモト沙參ノ別名デアアルベキダガ陳氏ノイフノハ羊角菜ヲ指スノデアルト論ジテ居ル

「本草綱目啓蒙」著者蘭山ハ明カニ沙參ヲ以テつりがねにんじん・つりがねさう、羊乳ヲ以テつるにんじん・つ  
るしやじんトシ兩者ノ區別ヲ明カニシテ居ル

然ルニ問題タルととき人參ナル名稱ハ前兩者何レノモノニ對シテ用ヒラレタモノデアアルカ疑問ガアル「本草綱  
目啓蒙」ニハ沙參ノ條下ニと、ぎにんじんトアルカト思ヘバ羊乳ノ條下ニモと、ぎにんじんトアル即チ沙參、

羊乳ノ何レニ對シテモと、ぎにんじんで通用スルヤウニ見エケレドモ後者ノ註ニ對州トアルノガ著者ノ注意  
ノ周到ナルヲ物語ツテ居ル即チ羊乳ヲと、ぎにんじんトイフノハ對馬ノ方言デアツテ標準トナリ得ヌトイフノ

デアアル、「俚言集覽」と、ぎにんじんノ條ニ

對馬ニテ羊乳つる人參ヲイフ

トアリ「本草綱目啓蒙」和人參ノ條ニ

對州ニテとときにんじん<sup>沙參ト同名</sup>ト云ハ即つるにんじんノ事ニシテ沙參ノ條ニ説トコロノ羊乳根ナリ



(1)をかとき、「本草和名」ニ桔梗ノ和名ヲ阿利乃比布岐一名乎加止々岐トシ「色葉字類抄」ニモ苳蓐(桔梗)ヲとき又をかときト訓シ「俚言集覽」増補ニモをかとき、草ノ名、桔梗ノ古名

ナドト記シテアル桔梗ノ形狀ガ沙參ニ似テ居ル所カラカク呼バレタモノデアラウ

(2)とき、「本草和名」ニ千歲藁一名藁薤藤ノ和名ヲ阿末都良一名止々岐ト記シテアルコハ地錦ノ一種デ「本草類編」ニ安末川良、「倭名類聚鈔」ニ阿末豆良、「新撰字鏡」ニ甘豆良、又後ニあまかつらト稱スルモノデアラツテ冬期其ノ莖ヨリ甘汁ヲ得ルヲ以テあまトイフ、蔓アルコト羊乳ニ似タルヨリときノ名ヲ得タモノデアラウ

(3)とき、「本草綱目」ニアル「續斷」ハ和名ヲ波美又ハ於仁乃夜加良トイフ「本草綱目啓蒙」ニハ前記二種ノ和名ヲ舉グル外、今をどりこさう・をどりさう・をどりばなトモイヒ播州ニテハ之ヲときトモイフヨシヲ記シテアル「俚言集覽」増補ニモをどりこさう(續斷)ヲ播磨ニテときト唱ヘルト記シテアル尙ホ「本草綱目啓蒙」ニハ續斷ヲ説明シテ

竹林中ニ多アリ八月比舊根ヨリ簇生ス方莖兩葉相對シ圓クシテ末尖リ鋸齒アリ冬ノ中ハ高サ五寸許春二三月ニ至レバ高サ一二尺葉間ニ花ヲ開ク節ゴトニ簇リテ生ズ長サ七八分笠ヲ戴キ尺八ヲ吹ク形ノ如シ故ニこもぞう花ノ名アリ云々

トイヒ「古名錄」ニハ

原野ニ多シ冬月ヨリ叢生ス春高サ二三尺莖方ニシテ葉兩對ス形狀蘇葉ニ似テ綠色二三月葉根ニ聚リ花ヲ開、益母花ニ似テ長大也其色淡紅、或ハ白色モアリ

ト記シテアル然ルニ「和漢三才圖會」躍草(此ノ名ヲ俗稱トシテ漢名ヲ舉ゲズ)ノ條ニ

按本草時珍所<sub>レ</sub>謂沙參之形狀與<sub>レ</sub>此能合焉、此草高尺許、莖微赤色、葉似<sub>二</sub>小葵<sub>一</sub>而兩々對生、三四月葉本開小花、白色帶<sub>二</sub>微赤<sub>一</sub>、狀似<sub>二</sub>人著<sub>レ</sub>笠躍<sub>一</sub>、故俗爲<sub>二</sub>躍草<sub>一</sub>、其根細長

ト説明シテアル「本草綱目啓蒙」・「古名錄」續斷ノ説明ト「和漢三才圖會」躍草トノ説明ガ略一致シテ居ル點カラ見テ「啓蒙」ノをどりこさう(なとりさう)ト「三才圖會」ノ躍草トハ同一物タルヲ知り得ベク一方「三才圖會」ニ躍草ヲ以テ沙參ノ形狀ニ似テ居ルナド記シテアルノヲ見ルト日本ノ或ル地方ニ於テ續斷ヲとときト稱ヘルノハ偶然ナラヌコト、思フ

カクノ如ク植物界ニ深イ根ヲ張ツタときナル語ノ語源ハ抑々何デアラウカ吾人ハ寡聞ニシテ未ダ之ガ説明ヲ試ミタモノアル耳ニセヌ余ハ此ノ語ヲ以テ朝鮮語ト關係アルモノト認メヨウトスル者デアアル

今日ノ朝鮮語デハ沙參ヲ더덕 (to-tok) トイフ

더덕 名 植 沙 參 (朝鮮總督府編朝鮮語辭典)

**蔘沙蔘** Esp. de plante dont la racine se mange comme légume. (Dictionnaire Coréen-Français)

**百步沙參** A variety of *Adenophora polymorpha*—used as food. (GALE: Korean-English Dictionary)

ノ如キハ之ヲ證シテ餘リアル

此ノ語ノ古イ歴史ハ未ダ不明ニ屬スルガ李朝世宗十五年（宣徳八年、西紀一四三三）權採ノ序ニヨツテ出版セラレタ「郷藥集

成方」(崇禎六年、西紀一六三三、重刊)ニハ沙參ヲ加徳トシテアル加ハ「加ヘル」義デ朝鮮語ノ訓ガ曰(으)徳ハ朝鮮字音曰(독)デアルカラ兩字ヲ合シテ曰(소독)ト讀ムベク今日ノ曰ト全然同一語デアル

次イデ中宗二十一年（嘉靖六年、西紀一五二七）崔世珍ニヨッテ作ラレタ「訓蒙字會」ニモ蔘ノ字ヲ曰イフト訓ジ醫書「東醫寶鑑」ニモ沙蔘ヲ曰イフトシ「濟衆新編」藥性歌ニモ沙蔘ノ効ヲ述ベ

沙參味苦、消腫排膿、補肝益肺、退熱除風

トナシ沙參ハ曰フトイフコトヲ補註シ英祖廟ノ「山林經濟」ニモ

沙參二月移種、經數年限大、作菜作脯作醫並佳、久食利人又治病

トテ沙參ヲ曰フト訓ジテ居ル、日本語ガ朝鮮語カラ此ノ語ヲ借用シタカ朝鮮語ガ日本語カラ取り入レタカハ別問題トシテ兩語ガ同一根原ニ出デタコトハ少シモ疑フベキ餘地ガ存シナイ、滿洲語 Huhachu (沙參)ノ如キモ此ノ語ト關係アルラシク思ハレル唯朝鮮ニ於ケル曰フナル語ガ日本語ニ於ケルガ如ク廣ク他ノ植物ノ名ニマデ適用セラレタ例ヲ發見シカネルノハ餘程趣ヲ異ニセルモノト言フコトガ出來ル (完)

註

- (1)「本草綱目啓蒙」卷八、古朝鮮ノ判事官タリシ者ガ持來ッタノデ此ノ名ガアルトイハレテ居ル
- (2) Japanese Encyclopaedia カラ探ツタトアル、「和漢三才圖會」人參、伊牟曾牟ニヨッタモノデアラウ
- (3) Koreanische med. Werke カラ探ツタアル、「東醫寶鑑」等ノ Sim ヲ誤ッタモノデアラウ
- (4) Klaproth: San kof tson ran to sets, ou Aperçu général des Trois Royaumes. (1832)
- (5) Grube: Jüen-chinesisches Glossar. No. 588.
- (6) 延喜式卷三十七典藥寮「諸國進年料雜藥」ノ條
- (7) 續日本紀聖武天皇天平十一年十二月ノ條
- (8) 貝原益軒ノ「大和本草」、小野蘭山ノ「本草綱目啓蒙」ナド
- (9) 瀧澤馬琴「玄洞放言」

## ○世界ニ蔓コルいろいろたけ(緋色茸)

故 理 學 士      安      田      篤

山ニ行キ森ニ行ク時朽木ノ膚ニ生ジ居リテ獨リ其環境ニ類例ノナイ赤色ヲ呈シ能ク吾人ノ目カラ遁レ得ヌモノハ緋色茸デアル、本菌ハ學名ヲ Polystictus sanguineus (L.) Mey. ト云ヒ大正十年ニ牧野富太郎氏ガ攝津國箕

世界ニ蔓コルいろいろたけ(緋色茸)